

News! the 世界遺産

シンポジウム「外国人から見た鎌倉」開催

2007年12月8日（土）午後4時過ぎから、鎌倉商工会議所ホールで、鎌倉ペンクラブと鎌倉世界遺産登録推進協議会主催で、シンポジウム「外国人が見た鎌倉」を開催しました。シンポジウムに先立ち、JCN 鎌倉・鎌倉テレビが世界遺産番組「鎌倉永劫」を映写、次いでパネラーの1人陳麗華さん（中国）が、琵琶を演奏しました。ホールは満員の来場者で埋まり盛会でした。

◎シンポジウム要旨



早乙女貢（司会）

鎌倉は12世紀以降、日本人の精神に影響を与えた武家発祥の地であり、山と海に囲まれて、外から攻めることができない地勢です。

世界遺産に当然登録されるべきだと思っています。鎌倉にかかわっておられる外国の方も同じ気持ちではないのでしょうか。

リチャール・コラスさん（フランス・シャネル社長・在日35年）

エールフランスの機長だった父に勧められて18歳のときに初めて日本に来ました。4年前に鎌倉で住まいを探しました。私のお墓も鎌倉に決めています。

パリの街づくりの基本は、現在あるものは壊さないで残していくということです。日本では遺産相続が大きな問題です。相続にあたって、70～80%をとられるとなると壊すしかない。ウサギ小屋みたいなものを作らざるを得なくなるのだと思います。

町のど真ん中に山があること自体珍しいことです。古都の寺があり、海も景観に自然に溶け込んでいます。世界遺産とは人間が作った美しさだけでなく、自然を生かした美しさを対象にしたものでもあります。ここに鎌倉の魅力があります。

エルファディング・ズザンネさん（ドイツ・景観と交通の研究・慶大総合政策学部講師・在日9年）

海外で暮らしてみたいと思い、日本に行こうとしたら、「何でそんな危ない国に行くの」と言われました。地下鉄サリン事件と阪神大震災のあとでした。今は街づくりと交通のかかわりで月に2度、鎌倉に来ています。ドイツ

では70年代、80年代以降、中心市街地を古いままに残しておこうという機運が表れてきました。きっかけは街



の個性がないと市街地が減びてしまうということがわかったからです。

沖縄大好きといいながらテーマパークやショッピングセンターだけに目がいく若者たちにもっと昔からの伝統を見直してもらいたいと思います。古代ローマの道のように世界

遺産登録に当たっては、道路も重要です。

陳麗華さん（中国・琵琶演奏家・在日24年）

最近「観音さま」という琵琶の曲を作りました。作曲の前に観音信仰が何なのか分からず、大船観音を回り、長谷観音に来ました。初めて拝顔したとき、何か分からず涙が出ました。毎月18日の縁結びの日に長谷観音で、ひたすら写経を続けるようになりました。

鎌倉のお寺は行く先々でお金を払わなくてはなりません。日本の文化遺産の修復などを見て、中国人たちは「古いものを非常に大切にしている」と感心しています。

中国では文化大革命で文化遺産をみな壊してしまいました。日本では、若い人たちがどれほど文化遺産の保全を考えてくれるのか、ちょっと不安です。



ニコラス・レナハンさん（英国・浄妙寺の庭園制作・造園技師・在日5年）

日本と英国の庭づくりの違いは、そのときに見たものが最高とする日本に対して、英国はオーケストラのように植物が重なって常に変化していくことです。日本の庭園の美しさは、静かな環境の中で見るものというイメージです。夢窓疎石が作った禅の庭ということで建長寺の庭園に興味を持ちました。

日本と英国では景観の違いはあるが、同じ精神性を感じています。英国の大学で禅宗の庭がはじめて造られたところだと教えられました。世界遺産登録をめざす鎌倉は、もっと禅宗と庭の歴史に興味を持ってほしいと思います。（了）